

# 人権ほっと26年10月号

「いじめ」問題を考える

大阪教育大学教授

島 善信

にしっかりと向き合い、対応できる力を身につけて欲しいと考えています。

『いじめ』という言葉を聞くと、中学校時代を思い出します。毎日、誰かがいじめられ、『次は誰?』とおびえる毎日でした。中学は小学校と違い、お弁当を自分の好きな子と食べます。私はその時間が嫌で怖くて、学校に行く時に涙が出てきて、立てなくなっただけです。

何年経っても忘れられないのがいじめです。先生には分からないような地味な嫌がらせもたくさんあります。そういう変化に気付ける教師でありたいです。」

筆者が担当する授業では、何時間かをかけて学校の「いじめ」問題を考えることにしています。冒頭の文章は、その際書いてくれたある学生のコミュニケーションカードの一部です。教師をめざして本学に通う学生のなかにも、小・中学校時代に、とてもひどいいじめを受けた体験をしている人が多いことに驚きます。そして、なお「いじめ」が小・中学校を広範におおい、子どもたちを深く傷つけている現状に改めて心が痛みます。

いじめられるために生まれてきた子どもなど誰もいない、いじめて良い理由など何一つない、いじめは集団の病理現象：。「いじめ」とは何か、何故起きるのかなど基礎から考え、将来教師になった時にきつと出会うことになる、その時

「私は身体的に他の人とは異なった部分があり、それは外見でも分かるほどのものです。．．．小学校の時に一度だけ、私の体のことをからかった男子を先生が大声で怒鳴りつけたことがありました。私はそんなに怒らなくてもいいのにと内心思っていました。実際はすごく嬉しかったです。心の傷を見落とさない実例です。」

「私は中一のとときにクラスの中心の女子に嫌われ女子のほとんどに無視されました。．．．誰かに助けを求めてもいじめがエスカレートするだけと思っていました。親にも友人にも言いませんでした。学校も休んだら負けと思いついていました。ある日担任に呼び出され『大丈夫?』と一言いわれただけで涙があふれました。」

二人の学生の文章は、教師が「いじめ」問題に向き合うとき、人間としての心のかまえや感性がいかに大きな癒（いや）しの力を発揮するかを如実に物語っています。

論理や理屈より前に、目の前の子ども心のふるえに寄り添い、その悲しみや辛さ、怒りを我が身に感じ、受け止めることのできる教師として育ててほしい。強くそう思います。